

武蔵野日曜講筵

罪の赦しと病の癒し

――マルコ伝第2章1～22節――

1977年11月6日

小池辰雄

屋根を穿ちて エホバはなんじの不義をゆるす 相手に対する全的信頼 心は得て得べからず
われこそ我みずからの故により いわゆる民主主義というもの 罪の赦し 病の癒し キリス
トに赦されて 何故と理由づけることなしに 我は罪びとを招かん 心の癌というやつ 赦し
と癒し 断食 新しき福音は新しき在り方をもって せざるを得ない 平伏しと赦し

【マルコ2:1～22】

1 数日の後、またカペナウムに入り給いしに、その家に在すことを聞きて、
2 多くの人あつまり来り、門口すら隙間なき程なり。イエス彼らに御言を語
り給う。3 ここに四人に担われたる中風の者を人々つれ来る。4 群衆によりて
御許にゆくこと能わざれば、在す所の屋根を穿ちあけて、中風の者を床のま
まつり下せり。5 イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言いたもう『子よ、
汝の罪ゆるされたり』6 ある学者たち其処に坐していたるが、心の中に、7 『こ
の人なんぞ斯く言うか、これは神を瀆すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦す
ことを得べき』と論ぜしかば、8 イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟り
て言い給う『なにゆえ斯ることを心に論ずるか、9 中風の者に「なんじの罪
ゆるされたり」と言う「起きよ、床をとりて歩め」と言う、いずれか易き。
10 人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に』――中風の者
に言い給う――11 『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』12 彼おきて
直ちに床をとりあげ、人々の眼前いで往けば、皆おどろき、かつ神を崇めて
言う『われら斯の如きことは断えて見ざりき』

13 イエスまた海辺に出でゆき給いしに、群衆もとに来りたれば、之を教
え給えり。14 斯て過ぎ往くとき、アルバヨの子レビの、収税所に坐しおるを
見て『われに従え』と言ひ給えば、立ちて従えり。15 而して其の家にて食事
の席につき居給うとき、多くの収税人・罪びとら、イエス及び弟子たちと共に
席に列る、これらの者おおく居て、イエスに従えるなり。16 パリサイ人の
学者ら、イエスの罪びと・収税人とともに食し給うを見て、その弟子たちに
言う『なにゆえ収税人・罪びととともに食するか』17 イエス聞きて言い給う『健



やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり』

18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食したり。人々イエスに來りて言う『なにゆえヨハネの弟子とパリサイ人の弟子とは断食して、汝の弟子は断食せぬか』19 イエス言い給う『新郎の友だち、新郎と偕におるうちは断食し得べきか、新郎と偕におる間は、断食するを得ず。20 然れど新郎をとらるる日きたらん。その日には断食せん。21 誰も新しき布の裂を旧き衣に縫いつくることは為じ。もし然せば、その補いたる新しきものは、旧き物をやぶり、破綻さらに甚だしからん。22 誰も新しき葡萄酒を、ふるき皮袋に入ること は為じ。もし然せば、葡萄酒は袋をはりさきて、葡萄酒も袋も廃らん。新しき葡萄酒は、新しき皮袋に入るるなり』

●屋根を穿ちて

1 数日の後、またカペナウムに入り給いしに、

ガリラヤ湖の一番北の方の湖沿いの所にカペナウムがある。今でも、キリストが伝道されたシナゴークの遺跡があります。非常に貴重なものです。これは舟に乗って行かれたんですが、

その家に在すことを聞きて、2 多くの人あつまり來り、

キリストが異常な人物であることがもう大分知れわたっているものだから。

門口すら隙間なき程なり。

中に入れないんですね、

イエス彼らに御言を語り給う。

伝道しておられた。これは会堂ではないようですが。

3 ここに四人に担われたる中風の者を人々つれ来る。

担架でもって、四隅から担われて来た。

4 群衆によりて御許にゆくこと能わざれば、

キリストの話を超満員で聞いているわけですから、入れない。

在す所の屋根を穿ちあけて、中風の者を床のままつり下せり。

そういう絵を誰か描いたか知りませんが、まだ見たことない。これは名画になると思いますがね。大変なことですが、これは。「屋根を穿ちて」ですから、人の家の屋根を破ってしまつて、そして吊り下ろした。向こうでは大体、家の回りは石造りです。木はあまりない。

「在す所の屋根を穿ちて、中風の者を床のままつり下した」

と。大体、屋根といいますが、日本みたいにいわゆる屋根形でなくて、平べったいわけなんです。ですから、横から登つていつて、上から真ん中をあげたらしい。



⁵ イエス彼らの信仰を見て、

「彼らの」というんですから、そこに中風を連れて来た人たちの、

「何がなんでもこれをキリストに」

というわけだね。

中風の者に言いたもう『子よ、汝の罪ゆるされたり』

これは驚いたですね。病の癒しですから、何か祈って病の癒しをなさるかと思つたら、そうではなくて、

「子よ、汝の罪ゆるされたり」

と。

● エホバはなんじの不義をゆるす

詩篇の103篇3節に、

「³ エホバはなんじがすべての不義をゆるし、汝のすべての疾を^{やまい}いやし、⁴ なんじの生命をほろびより贖いだし、^{いつくしみ}仁慈と憐憫とを汝に^{あわれみ}こうぶらせ、⁵ なんじの口を^{よきもの}嘉物にてあかしめたもう。斯てなんじは^{わかや}壮きて^{わし}驚の^{あらた}ごとく新になるなり。」(詩篇103・3～5)

とある。この103篇の3節というのは非常に著しいところです。

「エホバ」というのは、「ヤーヴェー」という存在者、実存者、実在者。それを「わが主」と読んでいた。向こうの経典を読むときに、

「ヤーヴェー」

という字がくると、神の名をいきなり呼ぶのは畏れおおいということ、

「わが主」「アドナイ」

という読み方をやっていた。「アドナイ」の母音と「ヤーヴェー」の子音を一緒にすると、

「エホバ」

という読み方なる。だから、「わが主」という気持と「実在者」という両方の気持が入っているのが、むしろこの「エホバ」という読み損ないの、怪我の功名みたいなものです。それで、私はまた元に戻って、「エホバ」という読みの方が、昔からなんじでもいるし、両方の

「わが主にして実存者、実在者である」

というのが「エホバ」という読み方の中に含まれているから——今の学者はみんな「ヤーヴェー」と言ってますけれども——私は「エホバ」と元にもどしたいと思つて、やっているわけです。

「エホバ」が、主にして実在者なる神が、一切の罪をゆるし病をいやす。罪を赦し病を癒すというような神さまの絶対権、絶対恩寵。それを地上でもつてできるひとが現れた。こ



れがナザレのイエスです。

「子よ、汝の罪ゆるされたり」

なんて、普通の人には言えないことなんです。しかも、この中風の者の今までのことなんか何も聞かないで、いきなりこういうことを言えるというのは、イエスというひとは、ちゃんとその人物の見通しがきくひとです。過去にどういうことをしたか、今どうであるかなんていうことが見えてしまう。サマリヤの女の素性が見えてしまったでしょ（ヨハネ伝4章）。これもそういうわけです。

●相手に対する全的信頼

ところが、みんなの求めが非常に強いので、

「イエス彼らの信仰を見て」

と。「信仰」とは何もむずかしいものではない。

「自分の信仰が強い弱い」

と、そんなことを心配することはいらない。それは信仰を私しているからです。これは信じ仰いでいる。仰いでいるというのは、仰ぐ実在者があるから信じ仰いでいるのであって、自分の側を信じているんじゃないですよ、信仰というのは。自分の信念でも何でもありません。相手を信じているんです。相手を信じ、仰ぎ奉っているんです、「信仰」という言葉は。「仰」の字はなくてもいいけれども、「信ずる」という字だけで。

だから、イエスが自分を100%にその時に求めて、信じられていくだけです。自分の状態がどうであるかであるなんて問題ではない、こっち側の状態は。とにかく、これ（相手）が100%。これが信仰ということなんです。それには働きがかかってくる。

ところが、自分を何かと思って、そして、何のかんのと、全的でない、100%的でない、相手に対する全的信頼でないものは、信仰と言えないんです。

祈っていて、

「こうなるでありましょうか？」

なんていう気持ちで祈っていたって、それはダメです。また、

「現象がこうなる」

ということ、現象を求めているでもダメ。申し上げているとおり、根源の現実、一番根っこの現実です。時間的にいうならば、それは終末的現実といえます。質的にいうと、空間的にいうと、根源現実です。時間的にいうと終末的現実。というのは歴史の終り、神の新天地です。終末的現実、根源現実に対する信。即ち、現在において永遠をつかむような在り方。相対的な次元において絶対的なものをつかむ在り方。

この部屋は限られた空間だ。けれども、みんな窒息しないでしょ。それは無限の空間とつながっているから窒息しない。有限の中に無限を宿している。人間の魂はみな、そういつ



た無限を宿さないではいられないように出来ている。他のどんなもので満足しても、本当は満足できない。満足したような顔しているけれども、絶対的なものを要するということは、誰でもが宗教の世界を要するということ。だから、私は、

「万人は宗教人である」

とはつきり言うんです。それを拒む人は拒んでいればいいよ。どうせ、それでお終いだから。気の毒になってしまふね、本当に。そんなことで、どうして満足できているのかと。

「幸福、幸福」

なんて、移りゆくような幸福なんていうことでは。ヒルティの『幸福論』というのは、そんな幸福を言っているのではない。私の『百世の師ヒルティ』（小池辰雄著作集第五巻 1977年8月刊）は正直、若い人たちに読んでもらいたい。私ははつきり言うんだ、

「自分の本を買ってくれなんて言っているのではない。本当にこれを読んでください」

と。それを、

「よしつ、先生がそう言うなら」

と言って、体当たりしてくる生徒、先生がいるかいなか。私は私心はないです。本当のものは何でも本当だと思うから。それが仏教であろうと、何教であろうと。

そういう根源現実です。キリストはそのような現実を持つているひとなんです。永遠をつかんでいるひと。永遠を生きているひとです。神さまと同質なんです。同質なキリストである。似ているのではない。似姿ではない。

「人間を神の似姿に造った」

と創世記に書いてある。あの「似姿」という訳も本当はあまり感心しない。人間は本来、神と同質に造られていた。まあ、ああいう神話的表现ですから、似姿なんていう言い方をしますけれども。その奥は、同質なんです。だから、

「霊止^{ひと}」

という。神霊^{とど}が止まっているのを本来、霊止^{ひと}という。

電車の中を見ても、町を歩いても、みんな希望のないような顔をしているよ。

「ああ、あんな人なんか救われるといいなあ」

なんて思うよ、私は電車の中で。向こうが聞けば、いくらでも話してやるけれども、いきなり話しかけたら、びつくりしちゃうからね。だから、言わないけれども。本当だよ。福音を身につけているひとは、機会があつたら、機^{おり}があつたら――何でも強引に人を折伏^{しやくぶく}するなんてことはよくないけれども――機会があつたら、いつでも語ってあげるといふ、皆さん、心備えをもっていますか。私のパンフレットなんかをカバンに入れておいてください。そういう人があつたら、

「どうぞ、お読みください」



と。誰にでもやるのではないよ。そういうようなことが本当の伝道というんです。

●心は得て得べからず

そういうわけで、全幅の信頼をもって、屋根をぶち破つてでも行つたという。

「求めよ、さらば与えられん」

という。それだけの求めをもつて、今の若い人たちが宗教の世界に、真理の世界にぶつかっているか。

『無門関』^{むもんかん}に書いてある。達磨^{だるま}さんのところに青年が道をたずねて来た。12月の寒い夕方

にやって来た。面壁している達磨さんに道を尋ねたところが、達磨は振り向きもしない。仕方がないから立ちすくんで、振り向くまで待っている。これは徹夜ですよ。だんだん雪が降ってきて膝まで没した。夜が明けそうになったから、達磨が

「何だね」

と問うた。青年は

「私はこのようにして道を求めています」

と答えた。達磨は

「いやいや、まだだめだ」

なんて言つて、また壁に向いてしまった。そうしたら、青年は自分の左の腕を切つて盆にのせて、

「私は棄身でございます」

と。さすがに、達磨も

「そうか。棄身で求めているか。それでは、私に心をもつてきてくれ」

「お前は今、腕を持ってきたけれども、心を持つてきてくれ」と。青年は

「心は得て得べからず」

「心を持つてきてくれと仰るが、私は心臓をくり抜くわけにはいきません」と言つたら、達磨が

「われ汝のために安んず」

と言つた。「それで安心した」と。さすがは、禅問答ですね。持つてくることのできないもの、心は、対象化して把^{つか}むわけにいかない。

「持つてくることのできないものが分かったか。それで、私は安心したぞ」

という意味なんです。それで、達磨は弟子にしてやって、この青年は禅宗の第二祖になった。

「慧可断臂」^{えかだんぴ}

という雪舟の絵がありますね。上野の博物館に行つて見てください。それだけ、昔の人は棄身で道を求めた。教えではない。道を求める。だから、私は「道」という字が好きだ。

「大道無門、千差路在り。この関を透得すれば乾坤独歩」^{せんさみち せんこんどつぽ}



という。

「日本人は道の民だ」

と、私は何回言っているかわからない。茶道、弓道、書道、画道、柔道という。『芸術のたましい』（著作集第二巻1976年12月刊）に書きました。

そういう求めです。

「求めよ、さらば与えらんれん」

というのは、

「棄身で求めろ」

ということですよ。しかし、求めるものは何かというと、神・キリスト、お釈迦さん、如来そのものをです。それ以下のものを求めるなということ。

私は、くだらない宗派根性なんてないですから。まだ、主義だの概念の世界で、とやかく沙汰し議論しているうちはダメです。そんなものは問答無用です。

●われこそ我みずからの故により

「子よ、汝の罪ゆるされたり」

とは、^{へきれき}霹靂の如きものだね。ところがすぐ、そいつを批判するやつがいる。

⁶ある学者たち

旧約の律法やなんかに詳しいのを「学者」といいます。

其^{そこ}処に坐^{すわ}しいたるが、心の中に、⁷『この人なんぞ斯く言うか、これは神を瀆^{けが}すなり、神ひとりの外は誰か罪を赦すことを得べき』と論ぜしかば、

これはユダヤ教でいえば、全くその通りなんです。だから、そういうように心のうちに思った。そう思ってまた外にも言ったらしいね。

⁸イエス直ちに彼等がかく論ずるを心に悟りて言い給う

もう、彼らの心の動きは顔を見ていれば分かるんですよ、キリストには。言葉に出さなくても。

「また、くだらない批評をしているな、ユダヤ教にこだわっているな。まあ、無理もないよ」

と言うわけだ、キリストから言えば。ユダヤ人というのは、律法やそういうことには嚴格だからね。

「神ひとりの外に人の罪を赦すことはできない。旧約聖書の神様の他にいないんだ」と。

『なにゆえ斯^{いか}くことを心に論ずるか、⁹中風の者に「なんじの罪ゆるされたり」と言う」と「起きよ、床^{ゆか}をとりて歩め」と言う」と、いずれか易^{やす}き。¹⁰人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に』



と。まあ、謎なぞのような言葉です。まだ中風は治されていませんよ。

イザヤ書を引用しましょうかね。旧約聖書では、何といっても、イザヤ書は最高最深いところですよ。43章25節。

「²⁵われこそ我みずからの故によりてなんじの咎とがをけし汝のつみを心にとめざるなれ」

と。非常に著しい言葉です。

「私は私みずからの故に

お前のためではない。私みずからのために

汝の咎を消し、汝の罪を心にとめざるなれ」

と。およそ聖書の宗教は御利益宗教とは違う。原因も理由も目的も全部、神さまです。我々の救いも神のためにです。神のための救いで、我々のための救いではない。全く神中心です。大体、

「私たちのために」

なんて言われて、あなた方はそれでいい気になりますか。こんな野郎のためになんて、そんな相対的なしよがないやつのためになんて。そうじゃないよ。そんな相対的なしよがない破れ器のためにはではない。

「神さまのために」

なんです。

●いわゆる民主主義というもの

「我思うゆえに我あり」

ではないですよ。デカルトはそんなことを言っただけでも。「我思うゆえに我あり」と、近代人はみんなそう思っている。シュバイツァーが攻撃した、

「デカルトはこんなことを言っただけ、空しい」

と。まあ、医科志望の学生は、シュバイツァーあたりは読まなくてはいかん。シュバイツァーの『わが生活と思想より』というのは素晴らしい本です。ああいうのを教科書に使いたいけれどもね。

どうも、この頃は次元が低くて困るよな。ただ会話のような語学をやっているから。いいんだよ、しゃべれなくなっただけ。いい加減なことをしゃべるよりも、本式なことを演説でやるやつの方が本ものだ。まあ、こういう横紙破りみたいなことを私は時々言うものだから、誤解されて困るけれども。私の気魄が分かってくれなくては困る。ドイツ語の教科書や英語の教科書を見ても、向こうの素晴らしい詩なんか載ってないじゃないか。だから、先生方に言うんだよ、

「いい詩をプリントにして教えてやってください」



と。ところが、先生方がそういう興味をもたなかったら——何も先生の悪口を言っているのではない——しょうがないわけだ。英語だったら、ロングフェローの

「サーム オブ ライフ」(A Psalm of Life 人生の歌)

なんていうのは、ぜひ読んでもらいたい詩です。

どういふんだろね、この頃は。いわゆる民主主義という、平板な類型的な、特色のないような人間をつくって何になるかと思う。それぞれの特色を本当に活かし鍛えあげて、そして大きなハーモニーとなる。交響楽がそうじゃないですか。笛は笛、バイオリンはバイオリン、ピアノはピアノ、太鼓は太鼓、それぞれの音を然るべき時にちゃんと組み合わせられて発するから、大交響楽になるじゃないですか。みんな同じ笛だったらどうなるか。

ベートーヴェンなんていう、ああいう頭は凄いね。ベートーヴェンは聞こえなくたって、自分でもう霊の耳で聞いてしまっているから、ああいうような作曲ができる。彼の偉大な作品は全部、自分の耳では聞こえなかった。ミルトンは盲でもって、あれだけの偉大な

『パラダイス・ロスト』『パラダイス・リゲインド』

を書きました。そういうことを思っても、もっと打ち込みが欲しいよね、今の人は。

私自身もずいぶんボヤボヤしてましたから、仕方がない。これから、あと20年くらい頑張らなくては。

●罪の赦し

「神さまの他に赦すものはない。お前はけしからん。人間のくせに、『汝の罪ゆるされたり』なんて、とんでもない冒瀆罪だ」

という。

「中風の者に『なんじの罪ゆるされたり』と言うと『起きよ、床をとりて歩め』

と言うと、いづれか易しいか」

という。皆さん、どっちがやさしいんですか。これは、

「罪ゆるされたり」

と言う方がやさしい。また、

「病癒されたり」

と言う方がやさしい。どっちの答も出てくるんです、私に言わせると。註解書にはしかし、「罪ゆるされたり」の方がやさしいというように普通は書いてあるよ。どっちも易しいとも言えるし、今度は、

「いづれか易き」

なんてキリストは仰るけれども、どっちも難しい。また、どっちも易しい。答はいくつも出てくる。困ったもんだね。その答はなぜそれだけ出てくるかをお話します。

罪の赦しは、神と同質の神の子でなければ言えないことです。難しいと言えば、これほ



ど難しいことはない。神さまの子でなければ言えないんだから。ただ、今仰っているのはキリスト自身なんだ。キリストは神の子であるから、このことを言うのはやさしいんです。彼は罪なきひとですから。罪なきひとだけが罪を赦すことができる。イザヤ書53章4節に、

「⁴まことに彼はわれらの病患^{やまい}をおい、我等のかなしみを担^おえり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。⁵彼はわれらの愆^{とが}のために傷^{きず}けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあたう。そのうたれし痕^{きず}によりてわれらは癒^いされたり。⁶われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。」(イザヤ53・4～6)

と書いてある。凡てのものの不義、罪を彼——エホバの僕^{しもべ}、キリスト——のうえに置きたもうた。キリストは不義のないひと。これは有名な「エホバの僕」の歌です。神の僕の歌。キリストは神の僕ですからね。神の子であり、神の僕である。「子」は、本質的に——質的なはなしです——神と同質であるから「子」という。「僕」というのは、神さまの意志を100%に行ずる人を「僕」という。100%に行じなければ、本当の僕ではない。パウロがキリストにひっくり返されて、

「我はキリストの僕」

と彼は言ったときに、全くキリストに従った。彼はそれで素晴らしいことになった。そのパウロが本当の自由をまた唱えた。御霊が来ているから。本当の僕は本当の自由なひとなんです。

●病の癒し

¹⁰人の子の地にて罪を赦す権威ある事を汝らに知らせん為に——中風の者に言い給う——¹¹『なんじに告ぐ、起きよ、床をとりて家に帰れ』

「お前の中風は治したぞ」

とは仰らない。寝ている者に、

「起きろ、床をとりて家に帰れ」

と。キリストは、ある時は手を取ったりする。ある時は、ただ言葉で言う。相手次第です。跛者^{あしなえ}を立ててしまったり、盲^{めくら}を治してしまったり、癩病人^{れいげん}を治してしまったり。大変なひとです。キリストは神の霊言^{れいげん}を持つているから、

「わが言は霊なり生命なり」

という。だから、「ゆるされたり」と言うと、相手は本当に根源的にゆるされてしまう。けれども、これはまだ或る意味において約束の状態です。キリストは十字架にかかるまでは、本当の罪のゆるしはなさらない。未来完了を今、現在完了としてキリストは言われた。また、キリストの行為、これも霊的な行為で力を持つている。



その「ゆるされたり」ということは、心の世界で受けとるんですね。これはある意味において、やさしい。ところが今度は、

「起きよ、床をとりて歩め」

となると、これは心の世界でなくて身体の現象にやってくるわけです。中風が癒された。なぜ、キリストがまず

「なんじの罪ゆるされたり」

と仰ったか。心の世界を本当の現実にもずもつてきたわけです。「ゆるされたり」と。

「もう、ありがたいな」

と。中風が何か悪いことをしたとみえる。

「しょうがないな」

と彼は思っていたにちがいない。それを100%に無条件にゆるされたとなったから、これはもう心の世界に喜びが来ているわけです。

「病は気から」

と言う。病気という。気の世界がおかしくなっているから。気の世界には、それが罪であろうと、悲しみであろうと、苦しみであろうと、いろんな原因があるよ。

「どうも落第してしまった。どうも失恋してしまった。事業に失敗してしまった。

悪いことをしてしまった」

とか、気がおかしくなるにはいろんな原因がある。

「みなに誤解されてしまった」

とか、何でもいいよ、気がおかしくなって滅入ってしまう。この「気」が病んでいる。この場合は、何か罪のことがあったから、

「罪ゆるされたり」

とおっしゃった。

気がおかしくなっている病気が治ってしまったているんだ。言葉の本当の意味の病気が治ってしまったている。気が病んでいるのが治ってしまったものだから、罪の世界がゆるされてしまったものだから、今度は、

「起きよ、床をとりて歩め」

と。相手の中風の人がこういう状態であれば、いきなりキリストはこれを仰るわけです。ところが、この状態を先ずはさなくはいかん。だから、この状態をはずさないで、いきなりこれをするのは難しいんです。ところが、キリストにとっては、先ず根源の世界の心の世界を言うことはやさしい。キリストが言われた、

「どつちが易しいか」

というのは、そういう気持で言われたと思われます。心の状態がよくなってしまっているから、今度はこれを言う。中風のこの人の場合は、いきなり



「床をとりて歩め」

と言えないんです、キリストは。だから、二段構えになってきたわけです。こっちの方が難しいんです、相対的な意味では。

そして、身体に力が加わるためには、こちらが本当に受けとる気になつていなくては加わりませんよ。私もしばしば人の病を癒しましたけれども、それは受けとる側が疑つていたら働かない。キリストですら、疑っている連中にはダメだと。それは人間は物理的法則ではないから。靈的法則だから、人間の世界は。物理法則ではないんだから。靈的法則とは心の世界だ。心がそっちに向いてないで分裂していたらダメ。

ただし、心が非常に悪いときでも、これを霹靂へきれきの如くにひっくり返すことが出来ますよ、キリストは。パウロがキリストに反抗していたときに、ひっくり返されたでしょ。そういう力を持っています、もちろん。けれども、本当の意味における信仰がなかったならば、受けとる気合がなかったならば、これは現象的には生じてこない。

●キリストに赦されて

神の子は神の子だ。今度は、我々はキリストを受けとっている者。キリストを受けとっている者は本当の意味では、聖霊が来ていなければ、御霊が来てないと、受けとっているとはいえない。キリストの聖霊が来てないと。だから、

「聖霊のバプテスマを受けていなければ、本当のキリスト者ではありませんよ」

とパウロが言っている通りです。人間は、私たちは罪びとだけれども、罪びとの中にキリストという、キリストの霊というものの凄いものが来ているというと、キリストは或るところで言っている、

「汝らも人の罪を赦すことができる」

ということを抑っているのはその意味なんです。私たちは手放しで人の罪を赦すことはできない。キリストに赦されているから、人を赦すことができる。赦されているから。そうでなかったならば、

「赦したけれども、また癩しやくにさわった」

なんていうことになる。神さまとの祈りの世界で、人を怨うらんでいたら、その人の祈りはきかれません。十字架の贖罪で私たちはキリストに赦されているから、赦すことができる。赦すことが、こっちが出来ても、相手がつつかかってくれば、しょうがないよ相手は。それは相手の状態でもって、相手はただ自分が地獄に落ちるだけのはなしだ。どこまでも物理法則ではないんだ。心的法則、心の法則の世界です。靈法の世界ですから。「自由」とか何とか言つたって、みんなそうですよ。

だから、人の罪を本当に赦してあげることができるし、またこの御霊の力でもって病を癒してあげることができる。やつてくださーいよ、皆さん、本当に。



「私にはまだそんな力はありません」

なんて、いつまでそんなことを言ってるんだ。自分で力を私しようと思つたら、いつまでたつてもダメですよ。自分には力がない。キリストだつて仰つたではないですか。

「私は何もできない。神さまが私を通してしているんだ」

とキリストが仰っているではないですか。いわんや、我々が自分でできるなんて思つたら大間違い。キリストが為し給う。

「自分はまだ修行が足りませんから。まだ私は愛が足りませんから」

なんて、何を言っているか。キリストに本当にぶつつぶれているんですよ、十字架でぶつつぶされているんですよ、自我というものが。自我というものがぶつつぶされているから、もうそこに漲^{みなぎ}っているところのキリストの愛が、力ある霊的な愛が働けば、必ず働きます。

「まあ、困つたな。これはやつぱり、小池先生に頼まなくては」

なんて、いつまで「小池先生」なんて言っているんですか。もう君たちは自分でやつてくださいよ。

●何故と理由づけることなしに

いきなり

「起きよ、床をとりて家に帰れ」

と仰つた。すると、

¹²彼おきて直ちに床をとりあげ、人々の眼前^{まのあたり}いで往けば、皆おどろき、かつ

神を崇^{あが}めて言う『われら斯^{かく}の如きことは断^{こと}えて見ざりき』

見たことがないと。その通り。もの凄い劇的なシーンですね。

画家にこういうところをひとつ描いてもらいたいね。もう気魄がくれば、形はどうでもいいんですよ。画家に限らず、誰でも描けるんだ。もう、気魄がくれば問題ではない。どうだね、あの棟方志功なんていう、あの絵を見てごらんよ。あんなのは私でもちよつと描けそうな絵だ。小学校の人の絵みたいだ。そういうようなのが、いわゆる外の形の整わざるところの、内側からのもの凄く発動しているところの力。それがいわゆる人間の相対的な形を破つた形を作っていく。そこが芸術の世界の素晴らしきでしょ。文章でもそうですよ。演説でもそうですよ。本ものはみんな、いわゆる形式を破っていく。もう、キリストが全くそのような歩きかたをしている。

¹³イエスまた海辺に出でゆき給いしに、群衆もとに来りたれば、之を教

え給えり。

この当時、録音でもあつてね、キリストの言葉をみんな録音しておいたら大変なことだ、これは。キリストの言葉の何分の一が伝わっているか分からないものな。だから、

「聖書はかけらだ」



とマルチン・ルターが言った。「聖書はかけらだ」という。これで神さまの言葉が全部伝わっているなんて思ったら大間違いなんです。『聖書の人ルター』（著作集第七巻1984年2月刊）を今度は書きますけれども、聖書はかけらだと言う。ただし、「かけら」を見て、その全貌が見えるような見方をしなくてはいいかん。象の尻尾を見て、あの象の全体の姿が見えたら、これは本当の見方だ。ところが、象の尻尾を見て、象は長いものだなんて言ったら、それはダメだよな。

¹⁴斯^{かく}て過ぎ往くとき、アルバヨの子レビの、これはマタイのことです。取税人です。マタイ伝を書いた人です。

取税所に坐しておるを見て『われに従え』と言ひ給えば、立ちて従えり。

「われに従え」と。今の青年だと、

「われに従え」

なんて言われると、

「何だ？」

なんて言つて反抗するのが多いよな。「はいっ」と言つて従つて来るのがいないんだ。

「何故と理由づけることなしに、ただ為^なして且^{かつ}死せんのみ」

„no reason why, but to do and die“

という。私はあの言葉が大好きなんだ。テニソンの詩です。クリミヤ戦争で、向かつて行った六百の騎兵が全滅した。もうこれは死地に向かつて突撃すると同じことが分かつていても、命令だから従ったああいいう詩は、私は感激して中学時代に読んだものだがね。どういうもんだらうね、全く今は。

●我は罪びとを招かん

¹⁵而^{しか}して其の家にて食事の席につき居給うとき、多くの取税人・罪びとら、

「罪びと」というのは律法をよく知らないで、いい加減な生活をしている者を罪びとと言つた。罪びとではないですよ。

イエス及び弟子たちと共に席^{つらな}に列る、

いわゆる宗教家、道徳家からつまはじきにされるようなご連中だ。

これらの者おおく居て、イエスに従えるなり。

キリストの教えは桁^{けた}がちがうんです。キリストは、旧約聖書でもつてこだわっているようなやつらのもつと上だからね。

¹⁶パリサイ人^{びと}の学者ら、イエスの罪びと・取税人とともに食し給うを見て、

その弟子たちに言う『なにゆえ取税人・罪びととともに食するか』

けがらわしいじゃないかと、こういうわけだ。

私は、池袋の――あそこらに紅灯の巷があるね――横丁を歩いていたら、袖引き女みた



いなのがいたわけだよな。そうすると、私と一緒に歩いてきた無教会の或る先生が、

「汚らしい」

と言った。私は、さすがは無教会だと思った。私はむしろ、そういう人たちに本当に福音を伝えたい気持ちでいるのに、

「けがらしい」

と言った。冗談じゃないよ。これはちょうど、

「なにゆえ取税人・罪びとともに食するか」

と言ったパリサイ人と同じ根性になってしまふ。無教会がパリサイだとは、私は言いませんけれども、どうもそういう傾向が強い。かえって、ああいう人たちの中には純真な魂のいることを或る検事の人が私に言ったです。

17 イエス聞きて言い給う『健やかなる者は、医者を要せず、ただ病ある者、これを要す。我は正しき者を招かんとにあらで、罪びとを招かんとて来れり』

健康者には、医者はいらない。病人にはこれが要る。

「健やかなる者は医者を要せず」

と言いますけれども、さて、誰が本当に健やかか。自分は健やかだと思っているのは実はあぶない。私なんか健康だなんて言っているとあぶないです。どこか少し欠陥のある人は大いに制限をして、節制して、かえって長生きするけれども、いわゆる健康な人はコロッとまいったりする。

私はもともと蒲柳^{ほりゅう}の質だから、大体自分の体力が分かってますけれどもね。「甲種合格」なんていう人はうっかりするとあぶない。私の亡くなった兄なんかは甲種合格で立派な身体をもっていた。精神力も肉体も立派でしたが、それだから、腸チフスにかかっても、夏だから暑いくらいに思っていたらしい。

「健やかなる者は、医者を要しない。病んでいる者はこれを要す」

と。ところが、私たちは、魂の世界では誰でも病人なんだ。自分は健康者だなんて思っているけれど、魂の方では病める者なんです。なんとすれば、我々はみんな罪びとだから。万人これ罪びとなり。

「晴天白日、天地に恥じず」

なんていう言葉があるけれども、神さまの鏡に見せたらダメですよ、誰だつて。神さまの前に本当に100%に、神と同じ心になっていくことの出来たのは――如来と同じになったのはお釈迦さん――神と同じになったのはキリスト。それだけです。その他にいないんだ。

●心の癌というやつ

ところが、パリサイ人は、自分たちは健康な者だと思っている、精神的に。自分を何ものかと思っているのは、これが霊的傲慢というんです。この罪は逆に一番重い。キリスト



が敵にしたのはそういうご連中です。

「我こそは宗教的な人間である。我こそは道徳的人間である」

なんて思っているやつらがキリストの敵なんです。キリストは「我こそは」と言えるひとなんだけれども、それを絶対に仰らない。自分を何ものともしない。だから、私はキリストのことを「無者」と言ったでしょ。自分を何ものともしない。私がない、無私者、私心のないひとです。

キリストはこう言われたけれども、

「お前たちこそ本当は病人だよ」

という言葉があとには含まれている。けれども、彼らはそれが分からない。

「私は取税人、遊女、癩病人や盲人や、しょうがないと言って自分を吐き棄てるよ
うな、そういった人たちを相手にしにやって来たんだ。そういう人たちを通して
私は天国を築いてゆくんだよ」

というのがキリストの天国なんだ。

この世の人たちは、価値がひっくり返ってる。神さまぬきに

「我こそは」

なんて思っているのはサタンの子だ。サタンはそういうんだから。サタンというやつは神に敵して、「我こそは」と言うやつが、これがサタンだから。マルチン・ルターが「白きサタン」と言った。黒いサタンと白いサタンと二つある。黒いサタンはすぐに分かるけれども、白いサタンは見かけ上、ばかに立派なんだ。ところがどっこいという。そういうのが一番悪い。

ところが、みんなこれは病者であり、みんなこれ罪びとです。

「すべての罪をゆるし、病をいやす」

という。心の世界と身体の世界。心の世界の罪の方がもつと身体の世界の病より重い。

癌はなかなか治らない。癌を本当に治すような術や薬が出来たら、これはノーベル賞金だろうね。ある程度は出来ているらしいけれども。だけれども、そういういかんよ、癌は。

ところが、心の癌、というやつは「罪」なんです。心の癌、心癌の方がなお悪い、体癌よりも。これが罪。自我というやつ、我執というやつです。みなこの我執をいかにしてやつつけることが出来たかというわけですね。この我執を宗教の世界で突破したのは、最澄、空海、法然、親鸞、日蓮、道元。これはみんなその問題でつくんで突破した連中ですよ。「南無

阿弥陀仏」になったり、「南無妙法蓮華経」になったり。私のは

「南無キリスト」

というんだ。



●赦しと癒し

これは心の癌が私たちは癒されたんだ。あなた方はキリストを受けとつたら。そうしたら今度は、

「床をとりて歩め」

という。身体の方の癌、身体病をこつちから治されていく。根源現実では治る。人間はどうせ死にますよ。けれども、肉体は亡びていきますけれども、今度は霊体がその後に見える。霊的な体が。霊身、霊体です。霊身霊体となって神さまのもとに生かされるのが、これが本当の救いです。罪の赦し、病の癒しが完全にされていく。地上ではダメだ。天界においてそうなっていく。

信仰的現実とは地上ではそうです。信仰的現実としては、罪は赦され、病は根源的には癒されているけれども、しかしながら、「永遠の生命」をこの肉体そのものは持つわけにはいかない。信仰的現実では両方とも癒されているけれども、今度はそれが生まの現実になるのは天界に於いてのはなしだ。キリストの甦りの生命というのはそのことです。

病気も根底においては既に癒されているということをはつきり受けとりながらいきなさいよ。現象面がどうであろうと。健全な身体がもう来ているんです、霊体として。だから、いつ死んでも、絶対にそれで亡びてしまわないんです。

●断食

さつきちよつと言いつたけれども、ユダヤ教ではキリストを「神の子」としなかったから、冒瀆者とした。ユダヤ人は今でもなおそう思っている。だから、イエスを受けとらない。

「キリストは預言者の一人だ」

くらいにかしない。だから、新約聖書は読まない。新約聖書を受けとらない。そういうユダヤ教のゴリゴリのチャンピオンがパウロだったんですよ。パウロがそういうユダヤ教のチャンピオンだった。だから、キリストを信ずる者を迫害していたでしょうが。これがキリストにひっくり返されて、本当にキリストの弟子になった。そういう事態をなぜ今、ユダヤ人たちは受けとらないかと、私は不思議でしょうがない。

「あれは、パウロは間違った」

と、そう言っているんだから。どういふんだらうね、ユダヤ人というのは。全く頑かたくだね。そういうユダヤ人と手放しで喜べるのかね。

18 ヨハネの弟子とパリサイ人とは、断食しいたり。

バプテスマのヨハネです。

人々イエスに來りて言う『なにゆえヨハネの弟子とパリサイ人の弟子とは断食して、汝の弟子は断食せぬか』

汝の弟子は食べてるねと。



私は夏の集会を、小海線の清里の清泉寮でやったときに、私の弟子の二、三人の人が断食してかかった。

「小池先生は断食しない」

と言って、私を審いた。その連中は出ていった。私は断食のための断食なんかしない。ある必要に迫られたときに断食をして集会をしたこともあります。けれども、「断食しなければ」と、そういう集会は――また或る人は断食して酒を飲んでいる人がある――これも間違い。キリストはそういうような意味において断食したり、なにか宗教的な勤行をすることをひとも仰っていない。

19 イエス言い給う『^{はなむこ}新郎の友だち、新郎と偕におるうちは断食し得べきか、新郎と偕におる間は、断食するを得ず。

「^{はなむこ}新郎」というのは、自分のことを「新郎」に例えて言われた。

「私が弟子たちと一緒にいるときに、私の弟子は断食できるか。新郎と偕におる間は断食する必要はないし、そうすることはできない。けれども、」

20 然れど新郎をとらるる日きたらん。その日には断食せん。

「私は十字架にかかる。今に私は向こうへ往つてしまう。その日には断食せざるを得なくなるだろう。そして、祈らざるを得なくなるだろう」

と。断食はただ断食のためでない。本当に祈るためです。それは断食して祈れば、凄い世界に入りますよ。経験して知っているから、私は。キリストは、

「私は今、新郎と一緒にいる。けれども、私が見えなくなったら、その時は、弟子たちは本当に祈らなくてはいかん。今度はそうしたら、何がやって来るか。聖霊がやって来る。十字架の贖罪をしてから、その後から聖霊が来るぞ」と言われる。

●新しき福音は新しき在り方をもつて

21 誰も新しき布の裂を^{きれ}旧き衣に縫い^ぬつくることは^せ為じ。もし^{しか}然せば、その補いたる新しきものは、旧き物をやぶり、^{ほころび}破綻さらに^{はなは}甚だしからん。

「新しき衣」は即ちキリスト、キリストの福音です。「旧き衣」は旧約の律法です。

「福音と律法は合わないんだ」

と、こういうわけです。福音は超律法の世界だから。

「旧約と新約は合わないんだぞ」

というわけです、はっきり言えば。

「旧約はただ棄てるのではない。旧約の世界は全部、私が新約でもつて満たしてしまつたんだ。だから、いらないんだ」

と。ただ否定しているのではない。旧約の精神の一番深いところを実は、新約でもつて成



就してしまっているから、これはもう要らない。モーセの十誡以上のものがキリストの山上の垂訓であるんです。

「汝、殺すなかれ」

と、モーセの十誡では言ってます。ところが、キリストは、

「兄弟を憎む者は殺したのである」

と言った。だから、キリストの律法の方が、福音はもつと深いんです。それでは、そういったようなことがどうしてできるかとなると、この愛の世界です。福音の根底は愛です。

ヒルテイーが

「愛は一切に勝つ」

と言った。これは彼の墓碑名になっています。愛は一切に勝つ。愛は一切を救い上げるということです。「愛は一切に勝つ」「天下無敵である」というのはどういうことかということ、相手をみんな救い上げていく力をもっているということ。敵を敵とも思わないということ。

「あの野郎！ 敵だ」

なんてやっているから、相対的次元にいるから、いつまでたっても始まらない。もう一つ上の次元に入ってしまうえば、楽でしょうがない。私はどう思われたって、いっそう痛くも痒くもない。

²² 誰も新しき葡萄酒を、ふるき皮袋に入ることとは為^せじ。

新しき葡萄酒、福音を、旧き皮袋、旧約の中にいれるわけにいかないと。

もし然^{しか}せば、葡萄酒は袋をはりさきて、葡萄酒も袋も廃^{すた}らん。新しき葡萄酒は、

新しき皮袋に入るるなり』

葡萄酒も袋もどっちもダメになってしまう。新しい葡萄酒は新しい皮袋に入れなくてはいけない。新しき福音は、新しき在り方をもつて、これを本当に成就していかななくてはいかんという。そこで、キリストは安息日も破ってしまう。その後に出てきます。

● せざるを得ない

皆さんは、こうやって安息日に、日曜日にやって来る。これはただボヤツとするために来たのではない。神の力を、キリストの力を、御言御霊を本当に化体させるために、体と化するためにやって来るんでしょ。安息日はむしろ、神のうちに安らうことによって、力を得んがために。聖書のうちに自分を没入させることによって、力を得んがために。

ところが、旧約の世界は、

「すべし、すべからず」

の世界で一生懸命やっているわけだ。そんなことではくたびれてしまうよ。道德では意志の選択を、選びをやる。これかあれかと。すべし、すべからずと。もう一つ越えてしまうと、学生ならば、



「私は生徒だから勉強せざる得ません。勉強することが楽しいんです」と、これが本当の世界です。

「勉強しないと、試験に落第するから。先生に叱られるから。入学試験に及第できないから」

なんていうのは本当の勉強ではない。ところが、そういう勉強がほとんど、100のうち99はそういう勉強の仕方をしている。

「私は試験で落ちてもいい。とにかく勉強せざるを得ないんだ」

という、そういう生徒がどこにいるかね。ざるを得ないで勉強する。

「ざるを得ない」

という歩きかたをやっていきましよう。これが福音の世界です。愛せざるを得ない。助けざるを得ない。勉強せざるを得ない。今日はもう休まざるを得ない、なんてね。とにかく、靈的法則の世界に乗っかってくれば、「ざるを得ない」という世界が本当の自由なんです。

「何々せざるを得ない」

という、これが本当の自由です。「ざるを得ない」というのは必然でしょうが。必然、即、自由ということになったならば、これは本ものになる。偶然じゃないですよ。

●平伏しと赦し

さつきから罪の話が出てきたが、病は、人間の肉体的な病は死をもたらず、肉体の死を。罪がもし贖われないと、これは「第二の死」にやってくる。「罪と罰」というね――ドストエフスキーではないが――罪の法則は罰です。罰をしないで赦される。

ところが、これは話がちよつとずれてしまうけれども、日本の刑法というのは少し軽すぎるね。人を幾人も殺しておいて、死罪にならないなんて、どういうんだろうね、あれは。

「それでは、俺は何してもいい」

なんていうことになってしまふ。

「目には目を。歯には歯を。生命には生命を」

という。これは旧約の世界だけれども、しかし、そういった厳然たるものが大事なんです、ある意味において。だから、キリストは生命をもつて、自分の死をもつて罪を贖った。

「まあ、よしよし」

なんて言つて赦したのではない。キリストは、我々犯罪者が死刑の宣告を受けた、

「その死刑を私が受けとつてやる」

と言つて、死んだようなのがキリストなんだ。我々の身代わりになって、キリストは罪を背負ったのが、これが「贖罪」ということです。けれども、それで終わらない。必ずキリストは、彼は罪びとではないんだから、「永遠の生命」として甦つてきた。

「この生命をお前たちにやるぞ」



と言うんです。

もう少し、罪と罰が厳然としていなくてはダメです。しかし、それに対して、

「本当に私は悪かった」

と悔改める。そこには赦しがある。悪かったという悔改がないところに赦しは来ないですよ、
「赦し」なんて言ったって。

「汝の罪ゆるされたり」

と、本当にそう言われたら、

「本当に私は申し訳ありません！」

と平伏す。

「ああ、そうですか、ゆるされましたか」

なんて言ったらダメだよ、そんなのはまた地獄に往ってしまう。そういう心の世界の、何
と言いますかね、人の目にはわからないことでも、神さまは知り給う。

悔改してもまた人間はやりそこないをやる。だから、キリストが

「七度を七十倍にして赦せ」

と言われた。「七度を七十倍にして赦せ」ということは、

「人間はどうにもならんよ」

ということだ、或る意味においては。

「その赦しは結局、私の十字架のほかにないんだ」

ということなんです。まあ、人間なんていうものはしょうがないもんです。戦争なんて
いうものは悪いに決まっているんだけど、もの凄い武器を作ってしまった、核兵器が
爆発したら、世界はもうお終いではないですか。分かりきっているんだ。分かりきってい
るけれども、武器で偽りのバランスをとっている。

もう人間というものがいかに救い難き存在であるかということがはつきりしている。絶
対に宗教の世界を要する。それをみんないい気な顔をしているよな。皆さんはこのことを
本当に身に試みて感じている方だから。その反対に、本当にキリストの救いの力を、生命
をいただいて動かなかったら、つまらんですよ。

それで我々は、キリストという

「新しき葡萄酒」

であるところの――葡萄酒の汁は一番血になりやすい。だから、血にたとえられる。血は生
命のあるところですよ――生命の福音は、生命ある聖霊の力によって――その「新しき皮袋」
というのはいわゆる律法でないところの靈法の中に入って――そして、生きようというわ
けです。では、今日はここまで。

